

愛媛県魚島 東喜美子

驚嘆と感動に彩られた島暮らし

かねてから憧れていた田舎暮らし、二人がその地を選んだのは魚島。五年前に埼玉県から移住し、夫は釣りに、妻は畑づくりにと今は島の自然に生かされた日々を送る。

教員を早期退職して 瀬戸内海の島へ

四年半前に埼玉から夫と二人で、瀬戸内海の燧灘ついでなだの真ん中にぽつんと浮かぶ小さな島、魚島に移住してきました。毎日、美しい海を眺め、私は畑づくりと磯遊び、夫は船釣りをして島暮らしを楽しんでいます。わが家の夕食は夫が釣ってきた魚を見て刺身、塩焼き、煮付け、フライなどと決まります。もちろんとりたての野菜や貝、海藻類も。埼玉では二人とも中学校の教員をしていました。夫が二五年、私が二六年

勤めました。子どもも長女は昨年結婚し、次女は埼玉の家に住み、社会人となっています。

夫は釣りに興味があり、家族旅行などもだいたい釣りのできそうなどころを選んで行っていました。いつの頃からか夫は、早期退職をして海の近くで田舎暮らしをしたいと言いました。私も、実現可能なら叶えてあげたいと思うようになっていました。時期については、子どもたちがある程度の年齢になって、経済的にもめどがいたらと考えました。

長女が社会人となり、次女が大学二

年生となった年に私も退職し、移住ということになりました。夫はその四年前に退職して移住の準備やアルバイトなどをしていました。子どもたちも小さい頃から、夫がこの夢について話していたこともあって、理解してくれました。私は退職後から引越しまでは毎日お弁当を作ったり、送り迎えなどをして子どもたちとの生活を充実させたいとできる限りのことをしたつもりです。また、今でも毎月魚や手作りのものなど送っています。引越しの日に、子どもたちから夫と私それぞれに渡された手紙は今でも大切にしまっており

ます。子どもたちは私たちを応援してくれ、私たちの生き方を誇りに感じているようでとてもうれしかったです。

島の方々の親切で 解消された不安感

さて、どのように魚島にたどり着いたかといえば、まず、夫はボート免許を取りたてで、命を危険にさらすことでもある船釣りを、五〇歳を過ぎてから始めるとなれば、太平洋や日本海の荒海よりも、おだやかな瀬戸内海こそ適していると思っただけです。次に、

夫が愛媛県庁で移住相談をしたときに、魚島で村民募集をしていると聞いたことです。当時は定住促進をしているところは数少なかったのです。私は以前から移住するなら定住促進政策などを行っている自治体の方が受け入れてもらいやすいのでは



自家用船の「俊恒丸」。娘たち(俊子・恒子)の名前から命名。

と思っていました。夫が退職した年に愛媛県庁に相談に来て、次の年には二人で魚島役場に相談に来ました。村民募集の条件には該当しませんでした。村民住宅は借りられそうな話でした。また、島での生活費も「お酒は飲みますか」と訊かれ、「飲みません」と答えると、「それでは都会の半分もあれば十分だ」という話でした。

できることになりました。また、魚島村のホームページで広報誌などを見たリ、東京で行われたイベント「アイランド」にも二回ほど行って、魚島の方と住宅相談などもしました。魚島村役場の村民募集への積極的な姿勢に好感を持ちました。少しずつでしたが、埼玉にいたときから魚島について知ることができて、不安を少なくできたように思います。

引越しの前日に私たちは魚島に着くつもりだったのですが、台風のため船が欠航してしまっただけで、因島に泊まり、翌朝魚島にきました。引越のため依頼したフリーでトラックが着くと役場の職員の方々が出てきて、一緒に荷物運んでくれました。急な坂の上にあるわが家まで、何回も重い荷物を運び上げてくださるのには、本当に頭の下がる思いでした。そ



カキ打ちに行ったとき、島の名人と。

のときの感激は忘れられません。そして、借家の紹介や家賃の受け取り、フェリーの手配など、当時の教育長さんには大変お世話になりました。村民募集が村にあるもう一つの島、高井神島の小中学校を存続させるための募集であったため、窓口が教育長さんだったのです。

いちばん気がかりだったのは子どもたちと離れて暮らすことでしたが、私自身も大学卒業後、静岡から埼玉に来て一人で生活したことを思えば、二人とも生まれ育った土地にいるのだから、何とかやっけていくだろうと思いつきました。また、魚島の人に受け入れてもらえるだろうかという不安も、親切なお隣のご夫婦、家の修繕や島暮らしのことを教えてくれる人、カラオケ教室に誘ってくれる人と次々に私たちに声をかけてくれ、早々となくなりました。



平成18年3月、夫が50cmの大きなタイを釣り上げた。

驚きと感激に満ちた島での日常

初めの一年は夫と二人で船釣りに出かけました。釣りというのは釣れない時間の方がずいぶん長いということを実感しました。それでも秋にはタイやアジ、冬にはメバルをたくさん釣ることができました。島の人には釣りや船について一から教えていただき、船の係留もやっていたいただきました。二年目からは夫も船釣りに慣れてきたので、だいたい夫ひとりで行くようになりま



埼玉の自宅で。左から長女、夫、筆者、次女。

くさんありました。

祉施設、漁協で短期間ずつ働いてきました。漁協ではいまも時々働いています。いろいろな魚を見られて楽しいです。介護保険運営協議会委員とCATV協議会委員もしています。夫は消防団と壮年会と交通安全協会、私は婦人会に属して草取りや文化祭バザー、旅行などに参加しています。埼玉にいた頃には夫が消防団活動をしたり、祭りの御神輿みこしをかついだりする姿は想像もできませんでした。島での生活のなかで、夫の意外な面を発見することがたくさんありました。

した。私が宿泊施設や漁協などの手伝いを頼まれたこともあり、私たち二人は、アルバイトや委員を頼まれることが多いです。夫はクリーンセンターで一年弱働き、今は行政相談委員と教育委員をしています。私は宿泊施設、保育園、健康福

私の畑づくりは、ほとんど隣のおばさんに教えてもらって、ダイコン、タマネギ、マメ、葉物類、ジャガイモ、夏野菜などを使わなくなった畑を借りてつくっています。小さな畑でも初心者の方にとっては驚くことばかりです。二ミリほどの種から四〇センチ以上のダイコンができるなんて感動しました。恥ずかしいこと、知らないことばかりでした。また、畑が斜面になっているので、耕すのも作業するのも結構大変でした。夫は畑までの道に階段を作ってくれたり、土止めや草除けを作ってくれたり、協力してくれました。穫れた野菜やもらったもので漬物やマーマレードなどの保存食も作っています。

三月になると磯遊びが始まります。大潮の午後、カキを打ったり、ヒジキやワカメを採ったりしてきます。もちろん島の名人が教えてくれます。採ってきたカキは塩水できれいに洗って酢ガキやフライに、ヒジキはよく洗って二回くらいゆでてから干します。ワカメもゆでて干したり、冷凍したりします。

四月、五月にはモズク、メカブ、その後はテングサとイギス。さまざまな海藻と料理を覚ええました。夫はサザエやワビ捕りに誘われます。漁師さんからのいただきものでは、瀬戸内のカニや貝などのおいしさに驚嘆しました。

自由な時間をたくさん持てたことで、毎日がウキウキしています。編み物や手芸などいろいろなチャレンジして、文化祭にも出品しています。夫もひょうたんを栽培して出品しました。ゆつくりと新聞を読んだり、推理ドラマを見たりもします。夜には火曜と木曜にエアロビ、水曜に英会話、金曜にカラオケと活動しています。カラオケには夫も一緒に行って集会所でレーザードイスクカラオケを数人で楽しんできます。文化祭ではステージ発表もしています。夫は声が良くてうまいと好評でした。日本舞踊や民謡、小中学校、保育園の学芸発表も文化祭で行われます。

島の図書室にも新刊書が続々と増えて楽しみです。町内の他の島にある図書館でも本やビデオなど借りられます。

また、診療所もあって、ムカデに刺されたときには直行しました。健康診断も毎年二人で受けています。島唯一の商店にはお年寄りの姿がよく見かけられます。健康福祉施設では週三回デイサービスが行われています。そこにある運動器具は島の住民が自由に使うことができます。公民館事業として行われる英会話教室も、魚島小中学校のALT（外国語指導助手）が無料で教えてくれます。お菓子教室には講師として関わり、シユークリームやところろんなどいろいろ作りました。小中学生五人、保育園児七人という少人数でも島の住民と合同の運動会は、先生方も総出でとても立派なものでした。青年団も保育園児と一緒に踊り、お年寄り出場種目も用意されています。少ない人数でもこんな感動的な、盛大な行事ができることを痛感しました。

自然のなかで発見も多く、暮らすには最高の島

一方、魚島地区の人口減少は著しく、

四年前には三〇八人でしたが、現在は二五九人となってしまいました。お世話になったおとなりのご夫婦も、今年息子さんの所へ引越し、数ヶ月でお二人とも亡くなりました。島での近所づきあいは都会とは全然違って、毎日のように行き来していたので、本当にシヨックでした。漁業中心の島にはなかなか後継者も育たないようですし、高校進学で島外に下宿することが多いようです。

高齢者が島の人口の半分ですが、漁業や老人クラブ活動などで元気にしています。高齢者から学ぶことは多くて自分の将来の姿を教えてくれているように思います。血縁関係の人が多い地域ですが、私たちにも分け隔てなく接してくれて、さまざまなことを教えてくださいたいです。夫は上下水道が一〇〇%完備し、公共設備の整ったこんないい島がなくなったらもったいない、とよく言っています。退職後、低コストで釣りなどをして生活したいと思う人にとっては最高の島ではないか、と

私たち二人は思っています。

海や山の自然の近くで生活することで、発見も多いです。鶯の初啼きは短くてだんだんに上手に啼くようになることや、潮の干満や風向きなど、以前は気にもかけなかったことが海の生活にはとても大事なことでわかったり、シャコが泳ぐときの足の動きがキュートで面白いことに感動したりします。

今年の秋にはヤマガラが庭にやってきました。四年半で夫の釣りも私の畑づくりも少しは上達しているのではないかと思います。

温かい人たちに囲まれての田舎暮らしに感謝しながら、島の人々のお手伝いもしていけたらと思います。二人ともできればここで一生を終えたいと思っています。

うおしま 魚島 data

今治市の北東35kmに位置する島。面積1.37km²、周囲6.5km、人口209人（平成18年11月末現在）。魚島へは尾道市因島土生港より町営船「ニューうおしま」で50分、1日4便。急峻な地形で平地が少なく、主産業は漁業。平成16年10月に1町3村7島が合併して上島町に。旧魚島村のころは同村・高井神島の学校存続を目的にホームページを活用して新村民を募集するなど定住促進に力を入れてきた。



東 喜美子 (あずま きみこ)

昭和29年生まれ。静岡県出身。埼玉県で26年間、中学校の英語教員を務め、平成14年7月に愛媛県越智郡魚島村（現上島町）へ夫と移住。娘2人は埼玉県在住。趣味も多く、なかでもパンづくりは好評。移住前にヘルパー免許を取得した。